

○神戸女学院大学研究活動不正行為対応規程

2015年5月27日

理事会制定

第1章 総則

(趣旨)

第1条 この規程は、神戸女学院大学（以下「大学」という。）における研究活動上の不正行為の防止及び不正行為が生じた場合における適正な対応について必要な事項を定める。

(対象)

第2条 この規程において対象とする研究活動は、大学で行われるすべての研究活動をいう。

(定義)

第3条 この規程において、次の各号に掲げる用語の意義は、当該各号に定めるところによる。

(1) 研究活動

研究活動とは、調査、実験、情報収集、分析、論文の執筆及び論文の投稿等、研究活動の立案から研究成果の発表までの一連の活動をいう。

(2) 研究活動上の不正行為

- ① 故意又は研究者としてわきまえるべき基本的な注意義務を著しく怠ったことによる、捏造、改ざん、又は盗用
 - ・捏造：存在しないデータ、研究結果等を作成すること
 - ・改ざん：研究資料・機器・過程を変更する操作を行い、データ、研究活動によって得られた結果等を真正でないものに加工すること
 - ・盗用：他の研究者のアイディア、分析・解析方法、データ、研究結果、論文または用語を当該研究者の了解または適切な表示なく流用すること
- ② ①以外の研究活動上の不適切な行為であって、科学者の行動規範及び社会通念に照らして研究者倫理からの逸脱の程度が甚だしいもの

(3) 研究者

- ① 学校法人神戸女学院に雇用され、大学において研究活動に従事している者
- ② 大学の施設や設備を利用して研究に携わる者

(4) 部局

- ① 国際学部（共通英語教育研究センターを含む）
- ② 文学部

③ 音楽学部

④ 心理学部

⑤ 生命環境学部（体育研究室を含む）

(5) 部局の長

学部長（第4号に定める範囲を所管とする）

（研究者の責務）

第4条 研究者は、研究活動上の不正行為やその他の不適切な行為を行ってはならず、また、他者による不正行為の防止に努めなければならない。複数の研究者による共同研究を行う場合は、個々の研究者の役割分担や責任を明確にし、当該研究活動の全容を把握する立場の代表研究者が研究成果を適切に確認しなければならない。

2 研究者は、大学が実施する、研究者倫理及び研究活動に係る法令等に関する研修（研究倫理教育研修）を受講しなければならない。

（研究資料等の保存・開示）

第5条 研究者は、研究活動の正当性の証明手段を確保するとともに、第三者による検証可能性を担保するため、当該研究の成果（論文、学会発表等）、及び、当該研究の基となる調査結果、実験過程、生データ、実験データ、実験結果、分析データ、実験・観察ノート、実験試料・試薬、その他関係データ・書類等（以下「研究資料等」という。）を、適正な保存方法により、一定期間適切に保存・管理し、開示の必要性及び相当性が認められる場合には、これを開示しなければならない。

2 大学は、研究資料等の保存および開示について、別に定めるものとする。

3 第2項の定める範囲と方法に則って、研究者は研究資料等を保存及び開示するものとする。

第2章 不正防止のための体制

（最高管理責任者）

第6条 研究倫理の向上及び不正行為の防止等に関し、大学全体を統括する権限と責任を有する者として、最高管理責任者を置く。

2 最高管理責任者は、学長とする。

3 最高管理責任者は、公正な研究活動を推進するために適切な措置を講じるものとする。

（研究倫理責任者）

第7条 大学における研究倫理の向上及び不正行為の防止等を推進する者として、研究倫理責任者を置く。

2 研究倫理責任者は、研究所長とする。

3 研究倫理責任者は、最高管理責任者を補佐し、公正な研究活動を推進するための適切な措置を講じる。

(研究倫理教育責任者)

第8条 部局における研究倫理の向上及び不正行為の防止等に関する責任を持ち、研究倫理教育について実質的な責任と権限を持つ者として、研究倫理教育責任者を置く。

2 研究倫理教育責任者は、学部長とする。

3 研究倫理教育責任者は、当該部局の公正な研究活動を推進するための適切な措置を講じるとともに、当該部局に所属する研究者に対し、研究者倫理に関する教育を定期的に行わなければならない。ここにいう「研究者倫理に関する教育」とは、第4条第2項に定める「大学が実施する、研究者倫理及び研究活動に係る法令等に関する研修（研究倫理教育研修）」等とする。

(大学研究倫理委員会)

第9条 神戸女学院大学研究倫理規程第6条に定める大学研究倫理委員会（以下「研究倫理委員会」という。）が、研究者による不正行為を防止するための役割を担う。

(研究倫理委員会の職務)

第10条 研究倫理委員会は、次の各号に掲げる事項を行う。

- (1) 研究倫理についての研修及び教育の企画及び実施に関する事項
- (2) 研究倫理についての国内外における情報の収集及び周知に関する事項
- (3) 研究者の不正行為の調査に関する事項
- (4) その他研究倫理に関する事項

第3章 告発の受付

(告発の受付窓口)

第11条 告発又は相談への迅速かつ適切な対応を行うため、内部監査室に受付窓口を置く。

(告発の受付体制)

第12条 研究活動上の不正行為の疑いがあると思料する者は、何人も、告発窓口に対して告発を行うことができる。

2 告発の手段は、電話、電子メール及び書面とする。

3 告発は、原則として、顕名により、研究活動上の不正行為を行ったとする研究者又は研究グループ等の氏名又は名称、研究活動上の不正行為の態様その他事案の内容が明示され、かつ、不正とする合理的理由が示されていないなければならない。

- 4 内部監査室長は、匿名による告発について、必要と認める場合には、研究倫理委員会委員長（以下「委員長」という。）と協議の上、これを受け付けることができる。
- 5 告発窓口は、告発を受け付けたときは、速やかに、最高管理責任者、委員長並びに当該告発に係る部局の長等に、その内容を報告する。最高管理責任者は、必要に応じて、その内容を常務委員会に報告するものとする。
- 6 告発窓口は、告発が郵便による場合など、当該告発が受け付けられたかどうかについて告発者が知り得ない場合には、告発が匿名による場合を除き、告発者に受け付けた旨を通知するものとする。
- 7 新聞等の報道機関、研究者コミュニティ又はインターネット等により、不正行為の疑いが指摘された場合（研究活動上の不正行為を行ったとする研究者又は研究グループ等の氏名又は名称、研究活動上の不正行為の態様その他事案の内容が明示され、かつ、不正とする合理的理由が示されている場合に限る。）は、委員長は、これを匿名の告発に準じて取り扱うことができる。

（告発の相談）

第13条 研究活動上の不正行為の疑いがあると思料する者で、告発の是非や手続について疑問がある者は、告発窓口に対して相談をすることができる。

- 2 告発の意思を明示しない相談があったときは、告発窓口は、その内容を確認して相当の理由があると認めたときは、相談者に対して告発の意思の有無を確認するものとする。
- 3 相談の内容が、研究活動上の不正行為が行われようとしている、又は研究活動上の不正行為を求められている等であるときは、内部監査室長は、最高管理責任者及び委員長に報告するものとする。最高管理責任者は、必要に応じて、その内容を常務委員会に報告するものとする。
- 4 第3項の報告があったときは、最高管理責任者及び委員長は、その内容を確認し、相当の理由があると認めたときは、最高管理責任者が、その報告内容に係る者に対して警告を行うものとする。

（告発窓口の職員の義務）

第14条 告発の受付に当たっては、告発窓口の職員は、告発者の秘密の遵守その他告発者の保護を徹底しなければならない。

- 2 告発窓口の職員は、告発を受け付けるに際し、その内容を他の者が同時及び事後に見聞できないような措置を講ずるなど、適切な方法で実施しなければならない。
- 3 前2項の規定は、告発の相談についても準用する。

(調査機関)

第15条 大学に所属する研究者に係る研究活動の不正行為等の告発があった場合、原則として大学が告発された事案の調査を行うものとする。

- 2 被告発者が他の研究機関で行った研究に係る告発があった場合、研究が行われた研究機関と協議して、告発された事案の調査を行うものとする。
- 3 被告発者が大学を既に離職している場合、現に所属する研究機関と協議して、告発された事案の調査を行うものとする。また、被告発者が離職後、どの研究機関にも所属していないときは、大学が告発された事案の調査を行うものとする。
- 4 大学での調査が困難であると判断された場合、告発された研究の分野に関連がある他の研究機関や学協会等の研究者コミュニティに調査を委託する、もしくは調査を実施する上での協力を求めることができる。
- 5 本来なら大学が行うべき告発された事案の調査を、当該事案に係る研究活動の予算を配分した配分機関が行うこととなったときは、誠実に協力するものとする。

第4章 関係者の取扱い

(秘密保護義務)

第16条 この規程に定める業務に携わる全ての者は、業務上知ることのできた秘密を漏らしてはならない。職員等でなくなった後も、同様とする。

- 2 最高管理責任者及び委員長は、告発者、被告発者、告発内容、調査内容及び調査経過について、調査結果の公表に至るまで、告発者及び被告発者の意に反して外部に漏洩しないよう、これらの秘密の保持を徹底しなければならない。
- 3 最高管理責任者又は委員長は、当該告発に係る事案が外部に漏洩した場合は、告発者及び被告発者の了解を得て、調査中にかかわらず、調査事案について公に説明することができる。ただし、告発者又は被告発者の責に帰すべき事由により漏洩したときは、当該者の了解は不要とする。
- 4 最高管理責任者、委員長又はその他の関係者は、告発者、被告発者、調査協力者又は関係者に連絡又は通知をするときは、告発者、被告発者、調査協力者及び関係者等の人権、名誉及びプライバシー等を侵害することのないように、配慮しなければならない。

(告発者の保護)

第17条 部局の長は、告発をしたことを理由とする当該告発者の職場環境の悪化や差別待遇が起きないようにするために、適切な措置を講じなければならない。

- 2 大学に所属する全ての者は、告発をしたことを理由として、当該告発者に対して不利益

な取扱いをしてはならない。

- 3 学校法人神戸女学院理事会（以下「理事会」という。）は、告発者に対して不利益な取扱いを行った者がいた場合は、諸規程に従って、その者に対して処分を課することができる。
- 4 理事会は、悪意に基づく告発であることが判明しない限り、単に告発したことを理由に当該告発者に対して解雇、配置換え、懲戒処分、降格、減給その他当該告発者に不利益な措置等を行ってはならない。

（被告発者の保護）

第18条 大学に所属する全ての者は、相当な理由なしに、単に告発がなされたことのみをもって、当該被告発者に対して不利益な取扱いをしてはならない。

- 2 理事会は、相当な理由なしに、被告発者に対して不利益な取扱いを行った者がいた場合は、諸規程に従って、その者に対して処分を課することができる。
- 3 理事会は、相当な理由なしに、単に告発がなされたことのみをもって、当該被告発者の研究活動の全面的な禁止、解雇、配置換え、懲戒処分、降格、減給その他当該被告発者に不利益な措置等を行ってはならない。

（悪意に基づく告発）

第19条 何人も、悪意に基づく告発を行ってはならない。本規程において、悪意に基づく告発とは、被告発者を陥れるため又は被告発者の研究を妨害するため等、専ら被告発者に何らかの不利益を与えること又は被告発者が所属する組織等に不利益を与えることを目的とする告発をいう。

- 2 理事会は、悪意に基づく告発であったことが判明した場合は、当該告発者の氏名の公表、懲戒処分、刑事告発その他必要な措置を講じることができる。
- 3 最高管理責任者は、前項の処分が課されたときは、該当する資金配分機関並びに文部科学省その他の関係省庁に対して、その措置の内容等を通知する。

第5章 事案の調査

（予備調査の実施）

第20条 次の各号に該当する場合、委員長は予備調査委員会を設置し、予備調査委員会は速やかに予備調査を実施しなければならない。

- (1) 第12条に基づく告発があった場合
- (2) 委員長がその他の理由により予備調査の必要を認めた場合

（予備調査委員会）

第21条 予備調査委員会は、3名の委員によって構成するものとし、委員長が研究倫理委

員会の議を経て指名する。

- 2 委員長は、調査委員が自己との利害関係を持つ事案に関与しないよう取り計らわなければならない。
- 3 予備調査委員会は、必要に応じて、予備調査の対象者に対して関係資料その他予備調査を実施する上で必要な書類等の提出を求め又は関係者のヒアリングを行うことができる。
- 4 予備調査委員会は、本調査の証拠となり得る研究資料等を保全する措置をとることができる。

(予備調査の方法)

第22条 予備調査委員会は、告発された行為が行われた可能性、告発の際に示された科学的理由の論理性、告発内容の本調査における調査可能性、その他必要と認める事項について、予備調査を行う。

- 2 告発がなされる前に取り下げられた論文等に対してなされた告発についての予備調査を行う場合は、取下げに至った経緯及び事情を含め、研究上の不正行為の問題として調査すべきものか否か調査し、判断するものとする。

(本調査の決定等)

第23条 予備調査委員会は、告発を受け付けた日又は予備調査の指示を受けた日から起算して30日以内に、予備調査結果を研究倫理委員会に報告する。

- 2 研究倫理委員会は、予備調査結果を踏まえ、協議の上、直ちに、本調査を行うか否かを決定し、最高管理責任者に報告する。
- 3 研究倫理委員会は、本調査を実施することを決定したときは、告発者及び被告発者に対して本調査を行う旨を通知し、本調査への協力を求める。
- 4 研究倫理委員会は、本調査を実施しないことを決定したときは、その理由を付して告発者に通知する。この場合には、資金配分機関や告発者の求めがあった場合に開示することができるよう、予備調査に係る資料等を保存するものとする。
- 5 研究倫理委員会は、本調査を実施することを決定したときは、当該事案に係る研究費等の配分機関並びに文部科学省その他の関係省庁に、本調査を行う旨を報告するものとする。

(調査委員会の設置)

第24条 研究倫理委員会は、本調査を実施することを決定したときは、同時に、その議決により調査委員会を設置する。

- 2 調査委員会は、委員長及び委員によって組織する。
- 3 調査委員会の委員の過半数は、大学に属さない外部有識者でなければならない。

- 4 調査委員会の全ての構成員は、告発者及び被告発者と直接の利害関係を有しない者でなければならない。
- 5 調査委員会委員長は、研究倫理委員会委員長（研究所長）とする。ただし、第4項に抵触するときは、研究倫理委員会委員長が指名する研究倫理委員を調査委員会委員長とする。
- 6 調査委員会の委員は、次の各号に掲げる者とする。
 - (1) 調査委員会委員長が研究倫理委員会の議を経て指名した学内外の有識者 若干名
 - (2) 法律の知識を有する学内外の有識者 若干名

（本調査の通知）

第25条 研究倫理委員会は、調査委員会を設置したときは、調査委員会委員の氏名及び所属を告発者及び被告発者に通知する。

- 2 前項の通知を受けた告発者又は被告発者は、当該通知を受けた日から起算して7日以内に、書面により、研究倫理委員会に対して調査委員会委員に関する異議を申し立てることができる。
- 3 研究倫理委員会は、前項の異議申立てがあった場合は、当該異議申立ての内容を審査し、その内容が妥当であると判断したときは、当該異議申立てに係る調査委員会委員を交代させるとともに、その旨を告発者及び被告発者に通知する。

（本調査の実施）

第26条 調査委員会は、本調査の実施の決定があった日から起算して30日以内に、本調査を開始するものとする。

- 2 調査委員会は、告発者及び被告発者に対し、直ちに、本調査を行うことを通知し、調査への協力を求めるものとする。
- 3 調査委員会は、告発において指摘された当該研究に係る研究資料等の精査及び関係者のヒアリング等の方法により、本調査を行うものとする。
- 4 調査委員会は、被告発者による弁明の機会を設けなければならない。
- 5 調査委員会は、被告発者に対し、再実験等の方法によって再現性を示すことを求めることができる。また、被告発者から再実験等の申し出があり、調査委員会がその必要性を認める場合は、それに要する期間及び機会並びに機器の使用等を保障するものとする。
- 6 告発者、被告発者及びその他当該告発に係る事案に関係する者は、調査が円滑に実施できるよう積極的に協力し、真実を忠実に述べるなど、調査委員会の本調査に誠実に協力しなければならない。

（本調査の対象）

第27条 本調査の対象は、告発された事案に係る研究活動の他、調査委員会の判断により、本調査に関連した被告発者の他の研究を含めることができる。

(証拠の保全)

第28条 調査委員会は、本調査を実施するに当たって、告発された事案に係る研究活動に関して、証拠となる研究資料等を保全する措置をとるものとする。

2 告発された事案に係る研究活動が行われた研究機関が大学でないときは、調査委員会は、告発された事案に係る研究活動に関して、証拠となる研究資料等を保全する措置をとるよう、当該研究機関に依頼するものとする。

3 調査委員会は、前2項の措置に必要な場合を除き、被告発者の研究活動を制限してはならない。

(本調査の中間報告)

第29条 調査委員会は、本調査の終了前であっても、告発された事案に係る研究活動の予算の配分又は措置をした配分機関等の求めに応じ、本調査の中間報告を当該資金配分機関等に提出するものとする。

(調査における研究又は技術上の情報の保護)

第30条 調査委員会は、本調査に当たっては、調査対象における公表前の研究資料等又は技術上秘密とすべき情報が、調査の遂行上必要な範囲外に漏洩することのないよう、十分配慮するものとする。

(不正行為の疑惑への説明責任)

第31条 調査委員会の本調査において、被告発者が告発された事案に係る研究活動に関する疑惑を晴らそうとする場合には、自己の責任において、当該研究活動が科学的に適正な方法及び手続にのっとり行われたこと、並びに論文等もそれに基づいて適切な表現で書かれたものであることを、科学的根拠を示して説明しなければならない。

2 前項の場合において、再実験等を必要とするときは、第26条第5項の定める保障を与えなければならない。

第6章 不正行為等の認定

(認定の手続)

第32条 調査委員会は、本調査を開始した日から起算して150日以内に調査した内容をまとめ、不正行為が行われたか否か、不正行為と認定された場合はその内容及び悪質性、不正行為に関与した者とその関与の度合、不正行為と認定された研究に係る論文等の各著者の当該論文等及び当該研究における役割、その他必要な事項を認定する。

- 2 前項に掲げる期間につき、150日以内に認定を行うことができない合理的な理由がある場合は、その理由及び認定の予定日を付して最高管理責任者に申し出て、その承認を得るものとする。
- 3 調査委員会は、不正行為が行われなかったと認定される場合において、調査を通じて告発が悪意に基づくものであると判断したときは、併せて、その旨の認定を行うものとする。
- 4 前項の認定を行うに当たっては、告発者に弁明の機会を与えなければならない。
- 5 調査委員会は、本条1項及び3項に定める認定が終了したときは、直ちに、最高管理責任者に報告しなければならない。

(認定の方法)

第33条 調査委員会は、告発者から説明を受けるとともに、調査によって得られた、物的・科学的証拠、証言、被告発者の自認等の諸証拠を総合的に判断して、不正行為か否かの認定を行うものとする。

- 2 調査委員会は、被告発者による自認を唯一の証拠として不正行為を認定することはできない。
- 3 調査委員会は、被告発者の説明及びその他の証拠によって、不正行為であるとの疑いを覆すことができないときは、不正行為と認定することができる。保存義務期間の範囲に属する研究資料等の不存在等、本来存在すべき基本的な要素が不足していることにより、被告発者が不正行為であるとの疑いを覆すに足る証拠を示せないときも、同様とする。

(調査結果の通知及び報告)

第34条 最高管理責任者は、速やかに、調査結果（認定を含む）を告発者、被告発者及び被告発者以外で研究活動上の不正行為に関与したと認定された者に通知するものとする。被告発者が大学以外の機関に所属している場合は、その所属機関にも調査結果を通知する。

- 2 最高管理責任者は、前項の通知に加えて、調査結果を当該事案に係る資金配分機関並びに文部科学省その他の関係省庁に報告するものとする。
- 3 最高管理責任者は、悪意に基づく告発との認定があった場合において、告発者が大学以外の機関に所属しているときは、当該所属機関にも調査結果を通知するものとする。

(不服申立て)

第35条 研究活動上の不正行為が行われたものと認定された被告発者は、通知を受けた日から起算して14日以内に、調査委員会に対して不服申立てをすることができる。ただし、その期間内であっても、同一理由による不服申立てを繰り返すことはできない。

- 2 告発が悪意に基づくものと認定された告発者(被告発者の不服申立ての審議の段階で悪

意に基づく告発と認定された者を含む。)は、その認定について、第1項の例により、不服申立てをすることができる。

- 3 不服申立ての審査は、調査委員会が行う。最高管理責任者は、新たに専門性を要する判断が必要となる場合は、調査委員の交代若しくは追加、又は調査委員会に代えて他の者に審査をさせるものとする。ただし、調査委員会の構成の変更等を行う相当の理由がないと認めるときは、この限りでない。
- 4 前項に定める新たな調査委員は、第24条第2項、第3項及び第4項に準じて指名するとともに、第25条各項に準じた手続きを行う。
- 5 調査委員会は、当該事案の再調査を行うまでもなく、不服申立てを却下すべきものと決定した場合には、直ちに、最高管理責任者に報告する。報告を受けた最高管理責任者は、不服申立人に対し、その決定を通知するものとする。その際、その不服申立てが当該事案の引き延ばしや認定に伴う各措置の先送りを主な目的とするものと調査委員会が判断した場合は、以後の不服申立てを受け付けないことを併せて通知するものとする。
- 6 調査委員会は、不服申立てに対して再調査を行う旨を決定した場合には、直ちに、最高管理責任者に報告する。報告を受けた最高管理責任者は、不服申立人に対し、その決定を通知するものとする。
- 7 最高管理責任者は、被告発者から不服申立てがあったときは被告発者に対して通知し、被告発者から不服申立てがあったときは被告発者に対して通知するものとする。また、その事案に係る資金配分機関並びに文部科学省その他の関係省庁に通知する。不服申立ての却下又は再調査開始の決定をしたときも同様とする。

(再調査)

第36条 前条に基づく不服申立てについて、再調査を実施する決定をした場合には、調査委員会は、不服申立人に対し、先の調査結果を覆すに足るものと不服申立人が思料する資料の提出を求め、その他当該事案の速やかな解決に向けて、再調査に協力することを求めるものとする。

- 2 前項に定める不服申立人からの協力が得られない場合には、調査委員会は、再調査を行うことなく手続を打ち切ることができる。その場合には、調査委員会は、直ちに最高管理責任者に報告する。報告を受けた最高管理責任者は、不服申立人に対し、その決定を通知するものとする。
- 3 調査委員会は、再調査を開始した場合には、その開始の日から起算して50日以内に、先の調査結果を覆すか否かを決定し、その結果を直ちに最高管理責任者に報告するものと

する。ただし50日以内に調査結果を覆すか否かの決定ができない合理的な理由がある場合は、その理由及び決定予定日を付して最高管理責任者に申し出て、その承認を得るものとする。

- 4 最高管理責任者は、本条第2項又は第3項の報告に基づき、速やかに、再調査手続の結果を告発者、被告発者及び被告発者以外で研究活動上の不正行為に関与したと認定された者に通知するものとする。被告発者が大学以外の機関に所属している場合は、その所属機関にも通知する。また、当該事案に係る資金配分機関並びに文部科学省その他の関係省庁に報告する。

(調査結果の公表)

第37条 最高管理責任者は、研究活動上の不正行為が行われたとの認定がなされた場合には、速やかに、調査結果を公表するものとする。

- 2 前項の公表における公表内容は、研究活動上の不正行為に関与した者の氏名・所属、研究活動上の不正行為の内容、大学が公表時までに行った措置の内容、調査委員会委員の氏名・所属、調査の方法・手順等を含むものとする。
- 3 前項の規定にかかわらず、研究活動上の不正行為があったと認定された論文等が、告発がなされる前に取り下げられていたときは、当該不正行為に関与した者の氏名・所属を公表しないことができる。
- 4 研究活動上の不正行為が行われなかったとの認定がなされた場合には、調査結果を公表しないことができる。ただし、被告発者の名誉を回復する必要があると認められる場合、調査事案が外部に漏洩していた場合又は論文等に故意若しくは研究者としてわきまえるべき基本的な注意義務を著しく怠ったことによるものでない誤りがあった場合は、調査結果を公表するものとする。
- 5 前項ただし書きの公表における公表内容は、研究活動上の不正行為がなかったこと、論文等に故意又は研究者としてわきまえるべき基本的な注意義務を著しく怠ったことによるものではない誤りがあったこと、被告発者の氏名・所属、調査委員会委員の氏名・所属、調査の方法・手順等を含むものとする。
- 6 最高管理責任者は、悪意に基づく告発が行われたとの認定がなされた場合には、告発者の氏名・所属、悪意に基づく告発と認定した理由、調査委員会委員の氏名・所属、調査の方法・手順等を公表する。

第7章 措置及び処分

(本調査中における一時的措置)

第38条 最高管理責任者は、本調査を行うことを決定したときから調査委員会の調査結果の報告を受けるまでの間、被告発者に対して告発された研究費の一時的な支出停止等の必要な措置を講じることができる。

- 2 最高管理責任者は、資金配分機関から、被告発者の該当する研究費の支出停止等を命じられた場合には、それに応じた措置を講じるものとする。

(研究費の使用中止)

第39条 最高管理責任者は、研究活動上の不正行為に関与したと認定された者、研究活動上の不正行為が認定された論文等の内容に重大な責任を負う者として認定された者、及び研究費の全部又は一部について使用上の責任を負う者として認定された者（以下「被認定者」という。）に対して、直ちに研究費の使用中止を命ずるものとする。

(論文等の取下げ等の勧告)

第40条 最高管理責任者は、被認定者に対して、研究活動上の不正行為と認定された論文等の取下げ、訂正又はその他の措置を勧告するものとする。

- 2 被認定者は、前項の勧告を受けた日から起算して14日以内に勧告に応ずるか否かの意思表示を最高管理責任者に行わなければならない。
- 3 最高管理責任者は、被認定者が第1項の勧告に応じない場合は、その事実を公表するものとする。

(措置の解除等)

第41条 最高管理責任者は、研究活動上の不正行為が行われなかったものと認定された場合は、本調査に際してとった研究費の支出停止等の措置を解除するものとする。また、証拠保全の措置については、不服申立てがないまま申立期間が経過した後又は不服申立ての審査結果が確定した後、速やかに解除する。

- 2 最高管理責任者は、研究活動上の不正行為を行わなかったと認定された者の名誉を回復する措置及び不利益が生じないための措置を講じるものとする。

(処分)

第42条 本調査の結果、研究活動上の不正行為が行われたものと認定された場合には、理事会は、当該研究活動上の不正行為に関与した者に対し就業規則等に従い懲戒処分等を行うことができる。

- 2 最高管理責任者は、前項の処分が課されたときは、該当する資金配分機関並びに文部科学省その他の関係省庁に対して、その処分の内容等を通知する。

(是正措置等)

第43条 研究倫理委員会は、本調査の結果、研究活動上の不正行為が行われたものと認定された場合には、最高管理責任者に対し、速やかに是正措置、再発防止措置、その他必要な環境整備措置（以下「是正措置等」という。）をとることを勧告するものとする。

2 最高管理責任者は、前項の勧告に基づき、関係する部局の長に対し、是正措置等をとることを命ずる。また、必要に応じて、大学全体における是正措置等をとるものとする。

3 最高管理責任者は、第2項に基づいてとった是正措置等の内容を該当する資金配分機関並びに文部科学省及びその他の関係省庁に対して報告するものとする。

第8章 雑則

（その他）

第44条 この規程に定めるもののほか、研究活動の不正行為の防止及び不正行為が生じた場合における適正な対応について必要な事項は別に定める。

（規程の準用）

第45条 本規程が対象とする研究活動以外であっても、大学がかかわると認められる研究活動には本規程を準用する。

（規程の改廃）

第46条 この規程の改廃は、学務委員会、教授会及び常務委員会の議を経て理事会が行う。

附 則

この規程は、2015年5月27日から施行し、2015年4月1日から適用する。

附 則

この規程は、2022年7月27日から施行する。（2022年7月27日改正）

附 則

この規程は、2025年4月24日から施行し、2025年4月1日から適用する。（2025年4月24日改正）